

## 第2章

# 人口の目標と土地利用構想

## 1. 人口の目標

人口の目標は、平成27年度に策定した「茨城町人口ビジョン」を踏まえ、次のとおり定めます（国勢調査ベース）。

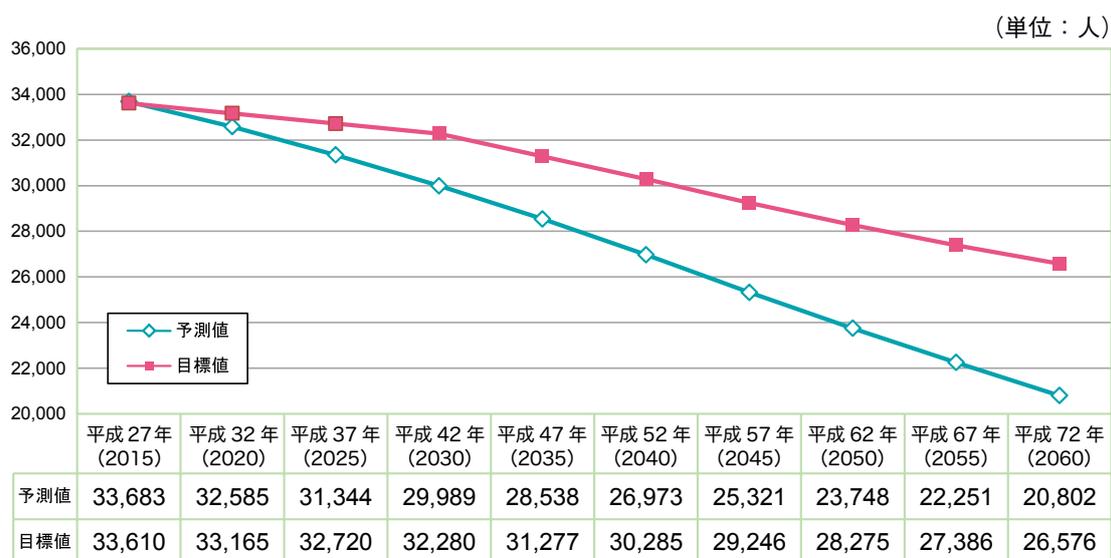
なお、「茨城町人口ビジョン」では、本町の人口の将来展望として、「平成72（2060）年に26,500人程度の確保を目指す」と定めており、本計画の目標年度である平成39年度の人口の予測値・目標値については、その過程の数値を算出したものです。

### 平成39年度の人口の予測値と目標値

予測値：30,800人

目標値：32,540人

長期的な人口の予測値と目標値（「茨城町人口ビジョン」より）



注1) 予測値は、国立社会保障・人口問題研究所の推計に準拠した推計による。

注2) 目標値は、合計特殊出生率の上昇や、桜の郷地区の整備による今後の人口移動予測を加味した町独自の推計による。

注3) 「茨城町人口ビジョン」では、予測値・目標値ともに5年ごと（国勢調査年）の数値となっているため、平成39年度の数値は、按分して算出し、10人単位としている。

## 2. 土地利用構想

土地利用構想は、平成27年度に策定した「茨城町都市計画マスタープラン」を踏まえ、3つのゾーンと7つの拠点、3つの骨格軸を設定し、それぞれの整備に関する基本的な考え方を次のとおり定めます。

### (1) 3つのゾーン

#### ■市街地形成ゾーン

既に市街化区域に定められている地域、面的な都市基盤整備を行った地域、市街化区域の周辺で既に一定の都市化が進行している地域などを、市街地形成ゾーンとして位置づけ、都市環境整備を進めます。

#### ■自然環境保全ゾーン

本町の自然や広大な田園など、良好な自然・農業環境を、自然環境保全ゾーンとして位置づけ、積極的に保全を図ります。

#### ■集落環境保全ゾーン

本町に多く分散する既存集落を中心とした地域を、集落環境保全ゾーンとして位置づけ、周辺の自然環境との調和を図りつつ、生活環境整備を進めます。

### (2) 7つの拠点

#### ■商業・業務拠点（都市拠点）

幹線道路の結節点として、大規模な商業施設や業務施設などが集積する前田・長岡地区を、本町や周辺地域における広域的な拠点性を有する商業・業務拠点として位置づけ、居住機能と共存する商業・業務系市街地の形成を図ります。

#### ■複合生活拠点（都市拠点）

独立行政法人国立病院機構水戸医療センターや特別養護老人ホームなどの医療・福祉施設、商業・業務施設が集積する新しい住宅地である桜の郷地区を、健康で魅力ある生活を送れる複合生活拠点として位置づけ、居住機能をはじめ、医療・福祉機能、商業・業務機能が配置された複合市街地の形成を図ります。

#### ■地域生活拠点（都市拠点）

住宅や身近な商店、業務施設が立地する小堤・奥谷・小鶴地区を、町民の日常的な生活利便性を高める地域生活拠点として位置づけ、近隣の住宅地と調和した商業環境の整備を進めます。

## ■行政サービス拠点（都市拠点）

町役場や総合福祉センター「ゆうゆう館」などの公共公益施設が集積する地区を、行政サービス拠点として位置づけ、町民の利便性向上のための行政サービス機能の維持・充実を図ります。

また、本町の中心地であり、都市基盤施設が整備されるなど、既に市街地を形成している地区であることから、市街化区域への編入を進めます。

## ■産業集積拠点（都市拠点）

茨城中央工業団地や茨城工業団地を、まちの活力を高める産業集積拠点として位置づけ、企業立地の維持・促進を図ります。

## ■自然・交流レクリエーション拠点

涸沼や河川などの自然資源、「小幡城跡」や「小幡北山埴輪製作遺跡」などの文化・歴史的資源を、自然・交流レクリエーション拠点として位置づけ、余暇活動の場や観光・交流資源として保全・活用を図ります。

## ■農業関連産業拠点

広域幹線道路による交通利便性を生かし、本町の基幹産業である農業の活性化を図るため、茨城空港北インターチェンジ周辺を、農業関連産業拠点として位置づけ、農産物の生産・加工・貯蔵などの機能誘導を図ります。

# (3) 3つの骨格軸

## ■広域連携軸

北関東自動車道や東関東自動車道水戸線、国道6号を、広域的な交流を促進する広域連携軸として位置づけ、引き続き交通機能の維持・発展に向けた取り組みを促進します。

## ■都市間連携軸

主要地方道大洗友部線、茨城鹿島線などの主要な幹線道路を、本町と周辺都市、市街地間を結ぶ都市間連携軸として位置づけ、未整備区間の早期整備、道路環境の向上を促進します。

## ■水と緑の連携軸

涸沼へ注ぐ涸沼川、涸沼前川、寛政川などの主要な河川、河川沿いに広がる田園や樹林地などを、本町の自然・文化・歴史的資源を結ぶ水と緑の連携軸として位置づけ、環境・景観の保全・整備を図ります。

